

第六十一回神田古本まつり

土屋 博

コロナ禍の下、二〇一九年秋以来、「神田古本まつり」、永らく開催せらるること無かりき。今回、令和四年三月十七日木曜より二十一日月曜迄、實に二年半振りの變則的開催とはなれり。小生、餘りに久方振りなれば、血湧き肉躍る心地こそすれ、感染リスクも覺悟の上、行かざるべからずとの結論に到り、晴天の三月十九日土曜に赴けり。

當日の收穫品は以下の通り。堰を切りたる如く、手に持てる限りの珠玉の古書群を購入したる形となれり。

一「百人一首畧解 全」下野遠光著

(博文館、明治廿五年刊、正價金十五錢、一六八頁)

古書價格四百四十圓也。女學全書の第二編なり。當時、百人一首は女性に求めらるる教養の最高の一なりき。ちなみに、博文館「女學全書」の構成は、以下の通りなれば、百人一首の重要性、推して知るべし。①日本小文典、②百人一首畧解、③書法、④習畫法、⑤室内粧飾法、⑥家政整理法、⑦作文法及婦女用文、⑧禮式並遊戲法、⑨裁縫毛糸縫物法、⑩育兒法、看病法、⑪衛生法、生理大意、⑫内外烈女鑑。

二「國文評釋 第壹編、第四編」第一高等中學校教授落合直文著

(博文館、明治廿五、廿六年刊、定價各拾貳錢、一〇六頁、一〇九頁)

古書價格各二百圓也。第一編の目次を見るに、清水濱臣「きぬたをきく詞」、中島廣足

「月夜聞琴記」、加茂眞淵「萬葉考序」、伊勢物語「小野の深雪」、源氏物語「蓬生の宿」、太平記「落花の雪」、鴨長明「方丈記無常論」、徒然草「四季の變遷」、源親房「神皇正統記足利高氏論」など。一方、第四編は源平盛衰記「宇治河」及び源氏物語「廢寺の露」の

二長篇のみ。落合直文の評釋の一例、「盛衰記の文、これと漢混淆文の始祖にしてその思

想は高妙なる佛理より脱化し來る。されば優美凄慘勇壯、文章の素としては一の兼ね備はらざるものなく、また寸毫の遺憾なし。戦記文中空前絶後と稱せらるゝも、まこと溢美にあらざるなり」と。

三「普通教育 新體作文例題 上下」元木貞雄撰

(文盛堂榊原發行、明治廿六年刊、和綴)

古書價格四百圓也。文學博士重野安繹^{つぐ}先生の題辭は、「言粹辭達」。たとへば、新年を賀する雅文の例について見るに、「風紀更まり萬象相雍^{やは}らぐ、恭しく惟るに貴家福祥愈々多く新禧を迎へらる何ぞ欣喜に勝へん、弊家も亦安泰にして威犬馬^{みな}の齡を加ふるを得たり、幸に尊慮を勞すること勿れ、客歲高顧を被る頗る厚し、眞に感荷^{かんか}に堪へざるなり、伏して希くは後來益々渝らざらんことを、茲に祝章を修む書餘永陽を期す、謹言」と。

四「日本外史講義 上中下」片岡潛夫講述

(田中宋榮堂、明治三十年四版、帙入)

初版は明治二十八年。川田甕江先生序。緒言より、「凡そ外史を修むるには先づ丁寧に通讀し十餘度に至れば大體を暗記し得らるものとす。然る後に本講義を一讀せば疑はしき所も六つけ敷所も一樣に分りすらりと通ずるなり」と。

五「大絃小絃」大町桂月著

(博文館、明治三十三年刊、定價金參拾錢、四一〇頁)

古書價格七百五十圓也。「文明の北漸」、「德育を論ず」、「土佐人士の氣質」など、實用達意の普通文を集めたるものなり。二度目の購入。

六「明治大家文集」大町桂月編

(日高有倫堂、明治三十九年刊、四八〇頁)

古書價格二千圓也。大町桂月、序に曰く、「つらつら明治四〇年間の文壇を見るに文章にすぐれたるの士もげに多い哉。まづ福澤翁は一代の識者也。福地櫻痴は才子の大なる者也。成島柳北は風流瀟洒その文輕妙にして人を引きつくる力あり。」以下略。本書の收録作品の例を擧ぐれば以下の如し。明治の時代に文語の使ひ手の豐穰なるを羨む。森鷗外よりは「即興詩人」より、露の宿・わかれ、水の都の二カ所。夏目漱石よりは我輩は猫である。徳富蘇峰よりは「靜思餘録」より感激及び故郷春色今若何。三宅雪嶺よりは英雄論。内藤湖南よりは「燕山楚水」より北京、沿革、城壁の觀月。久保天隨よりは雨龍川源の一夜。福澤諭吉よりは福翁百話。幸田露伴よりは秩父紀行。樋口一葉よりは「あきあはせ」。

七「格言訓話 日日の修養」山田愛劍著

(至誠堂、大正六年十三版、正價金壹圓貳拾錢、八二八頁)

古書價格二百二十圓也。初版は大正六年、當時のベストセラーと覺ゆ。二度目の購入なれど、状態はより良し。たとへば、一月三十一日の言葉は、頼山陽の「士に貴ぶ所は節義あるを以てなり」。武士道の要旨は畢竟「節義」の二字に歸著する由。

八「太平記註釋 上下」文學博士萩野由之校補

(誠之堂、大正九年三版、定價金貳圓五拾錢、二五三頁十三四二頁)

古書價格二千八百圓也。和綴、初版は明治三十四年。巻第一の冒頭、「狼煙」は、漢土にては狼の糞を燃す。烈風にても烟氣直上して斜めとならず。

九「古文眞寶新釋 前集、後集」久保天隨釋義

(博文館、明治四十二年刊、定價金七十五錢及び八十五錢、五四四頁十六三八頁)

古書價格二冊八百圓也。解題によらば、古文は古代文章の義、眞實は學者眞實至寶の義にして、宋の黃堅編選に係り、元の鄭本序を附して世に弘布せしものなり。七國より宋に到る諸家の作を選び、前集は詩、後集は文を録す。前後兩集を通觀せば、略ぼ歷代詩文の佳製を誦習することを得べし。我が邦には足利時代日本古典文學振興會渡來し、五山禪僧の詩文を習ふもの必ず之を模範とせり。目次をみるに、前集は勸學文（司馬溫公、白樂天など）、五言古風短篇（曹植七步詩、李白子夜吳歌など）、五言長詩（陶潛飲酒など）、七言古風短篇（李白峨眉山月歌、曹蛩虞美人草など）、七言古風長篇、長短句、歌類（白居易長恨歌など）、行類（杜甫貧交行、白居易琵琶行など）、吟類、引類、曲類。後集は、辭類（陶潛歸去來辭など）、賦類（前赤壁賦など）、說類、解類、序類、記類、箴類、銘類、文類、頌類、傳類、碑類、辨類、表類（前出師表など）、原類、論類、書類。久保天隨は明治八年生れ、昭和九年歿、東京帝大漢文科卒、臺北帝大教授。

十一「繪本 日本外史 全十二卷」大町桂月譯述

（博文館、大正七年より大正十年にかけて刊行、各正價金壹圓乃至壹圓貳拾錢、①平氏二四四頁、②源氏二五七頁、③北條氏・楠氏二三八頁、④新田氏・足利氏上二三六頁、⑤足利氏中下・後北條氏二〇九頁、⑥武田氏・上杉氏・毛利氏二六〇頁、⑦織田氏上下二一四頁、⑧豊臣氏上中二五四頁、⑨豊臣氏下・徳川氏一、二〇六頁、⑩徳川氏二三、一九二頁、⑪徳川氏四、一八三頁、⑫徳川氏五、一六二頁）

永年探し求めつる名著を遂に發見することを得たるは嬉しき哉。およそ日本外史に關する書籍中、現代人にとりては分り易さに於いて筆頭に擧ぐべき名著なりと信ず。揃ひの古書價格參千圓は超破格にして、實は數萬圓の價值あり。全拾貳冊菊版和裝、每卷著色石版口繪四葉、木版挿畫約八十。宣傳文句に曰く、「賴山陽の日本外史は其の結構の偉大と文章の精妙と相俟つて、廣く一般に傳誦せられて家々必備の寶典たり。桂月先生多年愛讀の餘現代少年の讀物に適せしめんが爲に、之を平易なる口語に譯述し、加ふるに歴史畫家加藤

溪泉畫伯の彩麗なる密畫を以てし花實兼備、百年不朽の名著は茲に全國の家庭少年の机上を飾りて、彩華いよいよ燦然たるものあり、子弟修養の書籍を想ふ家庭父兄教師諸君は此無前の好著述によりて、千歳不磨の日本魂の依て來る所を明にし、忠君愛國の思想をせしめらるべし」と。

十一「四書講義、十八史畧講義」

(早稻田大學出版部、二一九十二―三頁)

古書價格。四書講義は早稻田大學教授牧野謙次郎述。十八史畧講義は早稻田大學教授桂五十郎述。

十二「新學生訓 全」大町桂月著

(富山房、大正十年十一版、定價金九拾錢、三三九頁)

古書價格五百五十圓也。初版は大正二年。歐陽脩の日本刀を詠じたる詩は、我が日本國の永らく「鋼鐵の國」なることを示す由。

十三「美文韻文 黃菊白菊」大町桂月著

(博文館、昭和二年五十二版、正價金八拾錢、三九八頁)

古書價格七百五十圓也。初版は明治三十一年。「國家の盛衰」より、「今日歐州に在て文化最も進まざる露西亞の兵力の尤も強きを見よ」、「支那にて六國を平吞せし者は當時文化の最も備はらざりし秦にあらざや」と。

十四「國文學大講座 源氏物語講義、枕草紙選釋、更級日記講義」

(日本文藝社、昭和十年、三一〇―二五十一―七三頁)

古書價格二百圓也。「源氏物語講義」は奈良女高師教授岩城準太郎先生述。「枕草紙選釋」は第三高等學校教授島田退藏先生述。「更級日記講義」は大阪高等學校教授宮田和一郎先生述。

十五「源氏物語繪卷 新撰五十四帖」後藤いづも畫伯（筆並びに解説）

（日本古典文學振興會、昭和五十二年刊）

古書價格五百圓也。函入。中古市場にては二萬圓以上の値も附くほどの幻の名著なり。既存の繪卷の故實考證不十分なることを慨嘆し、後藤いづも畫伯（明治二十一年生れ、昭和三十五年歿）の孜孜營々描き上げたるものなり。

十六「十八史略の人物學」伊藤肇著

（プレジデント社、昭和五十五年刊、定價千五百圓、三〇九頁）

伊藤肇は大正十五年生れ、昭和五十五年歿。滿洲建國大學卒。雜誌財界記者を経て評論家。佐藤榮作の一九六二年十月キューバ危機の最中に訪米しケネディと三時間も話合ふことを得たり。安岡正篤氏に智慧を授けられたる佐藤氏曰く、「大統領、シユバイツェルをご存知ですか。『戦に勝ちし國は敗れし國に對して喪に服するの禮を以て處さねばならぬ』との言葉を」と。

鮎川義介曰く、「十八史略には四千五百十七人の人物が出てくる。しかもそれぞれの性格が全部違ふ。これを克明に讀まば自ら人間學を會得出来る」と。

十七「座右の名文 ぼくの好きな十人の文章家」高島俊男著

（文春新書、平成十九年刊、定價七百參拾圓十税、二二三頁）

古書價格二百二十圓也。著者は昭和十二年生れ、東大院中國文學專攻。選ばれたる十人は、新井白石、本居宣長、森鷗外、内藤湖南、夏目漱石、幸田露伴、津田左右吉、柳田國男、寺田寅彦、齋藤茂吉。いづれも漢學の素養ある、文語の使ひ手ばかりなり。

十八「中國 詩心を旅する」細川護熙著

(文藝春秋社、平成二十五年刊、定價千六百圓＋税、二一五頁)

古書價格千圓也。週刊文春に亘り連載せられたるものなり。紙質著しく良く、全頁にカラー寫眞を附すは贅澤の極みなり。およそ細川氏の政治實績については毀譽褒貶あれど、漢詩入門書として見る限り、細川氏の育ちのかしこきを反映し、素晴らしき仕上がりなり。

(令和四年四月六日受附)